

短歌

たけうち はちろう
竹内八郎

萩市
(1899～1974)



【著作】
歌集『樹空』(昭和43・樹空出版会)
『樹空抄除草庵雜記』(昭和48)
『あらつち十周年記念歌集』(昭和35)

竹内八郎は、旧制萩中学校の二年生の頃、愛読していた『日本少年』の歌壇に投書して有本芳水氏の選をうける。

大正七年(一九一八)、同志社大学に入り、同僚の短歌会に出るようになり、川合良蔵氏のすすめで、『霸王樹』に入り橋田東声、白井大翼両先生の指導を受けるようになった。

その後、県下で最初の歌誌である、長府の毛利碧堂氏の『白梅』に参加。山口の『水可美』『文芸風土』などの郷土誌にも入会をする。

昭和二十年(一九四五)、復員。山口県立萩商工高等学校に復職する。

釈迢空(折口信夫)門下の名の知れた歌人、岩松文彌氏は当時宇部市立高等学校の校長であった。豪傑の風格で、飄々としながらも厳格な人柄で、社会教育にも熱心であり、歌誌『あらつち』を創刊。

創刊から三年後、岩松文彌氏は急逝。共に活動していた竹内八郎がその志を引き継ぎ、十九年の歳月をかけて編集発行につとめた。

現在、会員は「あらつち訓」を心とし、竹内先生の「料簡を正す」を作歌のこころとして励んでいる。(平成十七年)通巻六百号を宇部市で発行。短歌誌『あらつち』は五十六年継承されている。

(文・吉武久美子)



藍場川歌碑(萩市)



提供・阿武キヨ子

家ごとに池を構えて水を引き
朝夕清き藍場川流る
八郎

文芸愛好家の集い(昭和8、9年ごろ)



後列中央 竹内

竹内八郎 年譜

(提供・吉武久美子)

明治32(一八九九)年	一九歳	7月31日、山口県萩市浜崎町76番地、父竹内七三郎、母きぬの長男として生まれる。
大正7(一九一八)年	二四歳	3月、山口県立萩中学校卒業。
大正12(一九二三)年	二六歳	3月、同志社大学法学部卒業。4月、川崎第百銀行京都支店勤務。
大正14(一九二五)年	二八歳	4月、萩商業学校勤務。
昭和12(一九三七)年	四一歳	10月、応召。
昭和15(一九四〇)年	四四歳	10月、復員復職。
昭和18(一九四三)年	四六歳	12月、再度応召。
昭和20(一九四五)年	五五歳	10月、復員復職。
昭和30(一九五五)年	六六歳	3月、山口県立萩商工高等学校(教頭)退職。
昭和35(一九六〇)年	七一歳	『あらつち』主宰(昭和49年)。
昭和41(一九六六)年	六九歳	萩高等経理学校勤務。
昭和43(一九六八)年	七一歳	学校法人萩学園勤務。
昭和45(一九七〇)年	七四歳	3月、退職。10月、歌集『樹空』刊行。
昭和48(一九七三)年	七四歳	11月3日、杉道助翁記念文化奨励賞受賞。
		3月4日、歌碑除幕。萩市の藍場川畔に建立。
		「家ごとに池を構へて水を引き朝夕清き藍場川流る」
		『樹空抄除草庵雜記』刊行。
昭和49(一九七四)年	七四歳	3月2日、萩市浜崎町の自宅にて死去。墓は、萩市の靈巖寺にある。

ひんがしの日出づる頃をかたむきて葭原が上は白き朝月
水涸れし朱塗の橋に倚るしはし月のひかりはまた峽に入る
かき餅を焼きある吾と子らの上大いなる春の月が見えくる
田床嶺に光射し来て満月の出でをはるまで橋に立ちたり
谿谷の霧の中より現れて濡れたる馬を曳きゆく一人
会果てて舗道に出づるそれまでは知らざりきこの明るき月夜

(歌誌『あらつち』より抜粋)

竹内八郎